

【 13 】

氏 名	田 畑 治 た ばた おさむ
学 位 の 種 類	教 育 学 博 士
学 位 記 番 号	論 教 博 第 14 号
学 位 授 与 の 日 付	昭 和 46 年 9 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	心 理 治 療 関 係 に よ る 人 格 適 応 過 程 の 研 究

(主 査)
論 文 調 査 委 員 教 授 倉 石 精 一 教 授 苧 阪 良 二 教 授 梅 本 堯 夫

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は心理治療において、治療者と患者の人間関係が、どのように展開し、そのなかになかなる治療的要因が含まれるかを、探索することを目的としている。

論文は9章からなり、1・2章は問題の展望、3・4・5章は理論的考察、6・7・8章は実証的研究に当てられ、9章において全体が総括されている。

展望編においては、内外の諸文献を参照し、多様な心理療法のなかから、代表的な9つをとりあげ、治療目標、治療者の仕事、患者の仕事、治療関係および患者の型の5つの観点から、それぞれの共通点と相違点を考察し、本論文の研究課題の背景を明らかにしている。

理論編においては、著者みずから治療にあたった1中学生の人格適応過程の事例分析から、治療関係の研究は、面接場面における治療者と患者との行動の考察に限定せず、面接の前後まで視野をひろげて、治療条件の構造を探る必要性をのべている。さらに、Rogers, Barrett-Lenard, Truax & Carkhuffなどの業績を詳細に検討し、従来の研究方法が、ほとんど他者による評定尺度法を用いたのに対し、本論文では、自己評定法を用いることにより、心理治療関係をより明らかに究明しうることをのべている。

本研究の主要な測定用具である「心理治療関係の体験目録」は以上の理由にもとづいて作成された。素資料として、治療者53名に対する「心理治療関係における体験の諸様式」の調査結果を用い、8個の治療要因を導き出し、1要因あたり15項目、計120項目からなる、5点法体験目録を作成した。この目録の信頼性は折半法で.76～.98、再検査法で.46～.87であり、因子分析の結果、「安定さと充実感」「積極的意欲」「深い尊重」の3因子が解釈された。同様な手続きで患者用の「体験目録」も作成され、信頼性は折半法で.48～.95、再検査法で.52～.80、因子分析で「意欲と充実感」「安定さ」「治療者を知覚する」の3因子が解釈された。

実証編においては、この「体験目録」を用いて、心理治療過程の考察を行なっている。

8組の治療について、初回面接と5回目面接の比較検討を行った結果では、初回では治療者は患者より

も意識体験が高く、治療関係の確立・展開の推進力になっているが、極度に高い意識体験をしているときは、患者の意識体験はむしろ低調であり、治療関係は停滞する傾向がある。因子得点では治療者の「安定さと充実感」「積極的意欲」の2因子と患者の「治療者を知覚する」因子が相関することがみとめられている。

また21組の治療関係について、中断した群と、10回以後も継続している群とを比較検討した結果では、中断群は治療者の意識体験が高いのに比して患者の意識体験が低く、継続群ではこれと逆の関係にあり、その得点は回を増すにつれ上昇していくことが認められている。中断する治療関係の指標として治療者と患者の相互の知覚のずれが指摘されている。

最後に、治療により人格適応に大きな変化のあった群と、変化の小さな群とを比較検討した結果では、前者の意識体験が高く、治療者・患者間のずれも小さいことが認められている。

なお人格適応上の変化の著しい2事例の詳細な分析により、治療過程は波状様に展開していくつかの危機をもっていること、そしてこの危機をのりこえて進む場合望ましい人格変化が増大することを明かにしている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、心理治療関係における治療要因を探索するのを目的としている。そのために関係諸文献を検討して、よく問題点を整理し、本研究の背景を明らかにしている。

探索の方法として、著者独自のすぐれた構想にもとづき「体験目録」を作成し、面接中およびその前後における治療者と患者の意識体験を指数化することを試みた。この作成に当っては、緻密な着想と周到な手続により、信頼性の高い自己評定尺度を構成したが、これは当該領域における、今後の研究に貢献するところが大きいと思われる。

また「体験目録」を用いて、心理治療過程を実証的に検討した結果は、治療の展開にともなって進行する人格適応過程についての、いくつかの法則性を明らかにし、治療の実践に示唆をあたえるものである。本研究は、治療過程についての従来の研究が、静的な指標の提示にとどまっているのに対し、治療者と患者との相互関係をより力動的にとらえ、治療過程の機微を客観的資料によって裏付けえた点で、一步を進めたものである。

本研究は、実証的に得られた知見は数多いとはいえないが、今後の心理治療の研究、とくに異なる心理療法間の比較研究、異なる臨床場面の比較研究、類型を異にする患者間の比較研究等に適用できる有力な方法を開発したものであり、さらに教育的人間関係の研究にも示唆をあたえるところの多い学術的貢献として評価される。

よって、本論文は教育学博士の学位論文として価値あるものと認める。